

シュメール語の主観性表現

— 書簡におけるアスペクト表現 —

峯 正 志

1. はじめに

シュメール語研究はこれまで主に欧米の研究者によってなされてきたため、彼らの手による文法書には欧米の言語の観点からの記述がよく見られる。例えば、ファルケンシュタインの文法書では、欧米の言語に見られる統語的カテゴリーがシュメール語に見られない旨の記述がしばしば見られ¹、欧米の言語中心の考え方が垣間見られる。

本稿ではそのような例の一つとして、シュメール語の書簡に現れるアスペクト表現を取り上げ、欧米の学者が不思議がるその現象を、認知言語学における主観性という概念を用いて説明したい。

2. 主観性表現とは

認知言語学の発展により、言語は話し手の「主観性」が色濃く反映されていることが、ますます明らかになってきた。つまり、ある状況を言語として表現する場合、話し手がどのような表現を選ぶかは話し手の事態の把握の仕方によるが、その把握の仕方に話し手の主観が大きく関わっているということである。ただ、認知言語学で用いられる「主観性」という用語はこのように大変重要な概念でありながら、研究者の注目する主観性の様々な側面に応じて実に多様に用いられている²。そのため、本稿で用いる「主観性」とは何かということをはっきりと示しておくことが必要である。

本稿で用いる「主観性」とは以下のことを指す。話し手が「事態把握（ある出来事をどのような違ったやり方で認識するかということ）」を行なって言語表現をするときに、いくつか異なる選択肢があった場合、どの表現を普通取るかということについて、言語ごとにそれぞれの捉え方の傾向がある。良く知られた例として日本語の「状況内に視点を置く」という把握の仕方がある。例えば、ある部屋に話し手が入ってそこに誰もいなかった場合、日本語では自分の視点から表現するので、「誰もいなかった」と表現するが、ドイツ語などでは視点が状況の外にあるため「私以外には誰もいなかった」と表現するというものである。このような場合、日本語のように事態の把握をする認知主体を言語化される事態の外に置いて、表現されないような場合を「主観的把握」、ドイツ語のように言語化される事態

の中に置いて、表現するような場合を「客観的把握」と呼ぶ³。

本稿でいう主観性表現とは、日本語の様に状況把握を話し手の主観により自由に行ない表現する、「主観的把握」を指す。

3. 二つの認知モード：IモードとDモード

上で述べたような、日本語と、ドイツ語や英語のような言語との認知モードの違いは、これまで様々な学者が様々な視点から独自の用語で捉えている。中村（2004）はそのうち9つを挙げている⁴が、認知主体を言語化される事態の中に置くか外に置くかという点に注目すれば、Langacker（1985）のオン・ステージ／オフ・ステージが、最も分かりやすいかもしれない。

さて、中村（2004）は、このような認知モードのいずれがより多く言語に反映されているかという違いにより、世界の言語は類型論的に二つのタイプに分類できるのではないかと提案している。この二つの認知モードは、中村（2004）ではそれぞれ次のように呼ばれている⁵。日本語のように状況の中に視点を置くのが前者であり、状況の外に置くのが後者である。

1) Iモード（認知のインタラクティブ・モード *Interactional mode of cognition*）

2) Dモード（外置の認知モード *Displaced mode of cognition*）

中村(2004)ではこれらのモードが関わっている 16 項目の言語現象を挙げている。これらの項目では日本語はすべてIモードの表現をとり、英語はDモードとなっている。しかし、言語類型として分類する場合には、ある項目はIモード、別な項目はDモードで表現するというように別々に分布することもあるように思われる⁶。中村の挙げた 16 項目とは以下のものであるが、シュメール語での状況については当てはまるものも、よく分からないものもある。これについては後でもう一度触れる。

1) 人称代名詞； 2) 主観述語； 3) 擬声語・擬態語； 4) 直接、間接話法； 5) 主体移動表現； 6) 過去時物語中の現在時制； 7) 間接受身； 8) 与格か間接目的語か； 9) 題目か主語か； 10) R/T か tr/lm か； 11) 非人称構文； 12) 代名詞省略； 13) 終り志向性； 14) アスペクト(進行形・「ている」)； 15) 動詞 vs 衛星枠付け； 16) (英語の)中間構文

4. シュメール語の書簡におけるアスペクト表現

さて、ここで実際に欧米の学者が不思議に思うシュメール語の書簡におけるアスペクト表現を見てみよう。シュメール語の書簡には、冒頭に書簡であることを示す定型表現が見られる。それは次のようなものである。

PN·e na·(b)e·a (改行) PN2·(ra) u3·na·du11

「(人名) が 言ったことを (人名 2)に 伝えよ。」

この表現の中には二つの動詞表現(下線部)が出て来る。しかしこれは、同じ意味の動詞「言う」の未完了形(e)と完了形(du11)である。「言う」という動詞は未完了形と完了形で動詞の語根が異なるのである⁷。

この表現に対して欧米の学者は違和感を覚えるようである。実は、翻訳で最初に出てくる「言った」に相当するのが未完了形で、「伝えよ(=言いなさい)」の方が完了形だからである。

後半の表現、つまり命令の形が完了形なのは、u3-という動詞接頭辞が動詞に完了形を要求するからであり、これは特に問題とはならない。しかし、前半の表現、つまり「(命令する者)が言った」という客観的に既に起こったことに対して(完了形でなく)未完了形が使われるというのは彼らにとって理解しがたいことのようなのである⁸。

このような立場を代表する Kienast and Volk(1995)は、「動詞 e は marú 語幹(筆者注: 未完了語幹)であるため、彼が言っていること、彼が(これから)言うこと、のように訳すべきであるが、そのような翻訳が適切であるかどうか考えてみなければならない」として次のような議論を展開している⁹。

まず、伝言を送るという行為に、1) 命令者、2) 使者、3) 受取人の三者が関与しているが、そのうち最後の受取人はこの行為に受動的に参加するのみであるため、伝言という行為には基本的に1) および2) の二者だけが中心的に関わっているのであり、ありうる状況は以下の二つだけであるとする。

(a) 伝言を命令者の側から表現している。

つまり、この表現は命令者が使者に対して発したものとする立場である。しかしこれは、発話者が「私」でなく自分の名をそのまま表現しているということになる上、使者から受取人への発言としてもおかしいため、この立場は適切でないとする。

(b) 伝言を使者の側から表現している。

これは、使者が受取人に言った表現であるとするものである。この場合の問題は、この表現が一つの文でなく、「これが(発話者が)言ったことである。(受取人に)伝えよ(と)」のように二つの文からなるとしなくてはならないことである。しかしながら、Kienast and Volk(1995)は、内容的にこちらの方が適切であるとし、この場合の問題点を次のように解決しようとする。

一つは、na·e·a 節が目的語ではなく名詞文であるという仮定をすることである。この場合、後にコンピュータの要素である·am3 が省略されていると考えれば可能である。確かに、コンピュータ要素の·am3 が省略されていることはありうる。しかしそうすると、na·が肯定の前接辞(preformative)となり、文法的に動詞は完了形(この場合は e でなく du11 の方である)でなければならなくなる。

そこで、この立場を取る場合は更に別の仮定をしなくてはならなくなる。それは、ここで用いられている動詞 e は通常の marú の e ではなく、特殊用法の e であり、完了の意味

を持つという仮定である。

しかしこれは非常に苦しい仮定であるといわざるを得ない。「言う」という意味の動詞 e と du11 の違いは未完了／完了の対立にあるとされており、そうでないとすると、手紙においてのみ別な対立があるとしなければならないからである。彼らはそれを意味的な違いによるものとしているが、言語の体系という観点から見た場合、難しいといわざるを得ない。

5. 日本語における時間認識

さて、以上のような議論に対してどのような対案が考えられるであろうか。実は、日本語話者にとっては、この表現は彼らが考える程複雑なものではないように思われるのではないだろうか。

実は中村(2004)で挙げられた16項目の中の(6)がこれと関連している可能性があるのである。「過去時物語中の現在時制」というのは、日本語で明らかに過去のことを語っている場面でも、動詞の「る形」が用いられることがあることを指しているのだが、これは語り手が状況内に身をおいて描写しているからであると考えられる。潘・小澤(2006)ではIwasaki(1988)からの引用として次のような例文が載っている。

A:ずっと東ドイツ…東…いやベルリンに行くまでねえ、道が全然何て言うの、明かりがないの。

B:まっくらなんですか。

A:ん。ほんとちょっと気持ちが悪かったの。距離感が全然なくなるのね。他の車は、他の車なんかもうまれにしかいないし、ん、で一、こう、信号があるとねえ、時々あの一、なんか三台四台ぐらい見えるけれどもね。

B:ん。

A:ほとんど…いないのね。

これは、ドイツで見てきたことを描写するのに、過去形でなく現在形を用いている。二人とも今現実にドイツの道を走っているような気持ちで話しているのであろう。確かにこのような状況なら、過去のこと「る形」を用いても不自然ではない、というより、むしろ「た形」で話すと過去の事実であることを繰り返して相手に訴えているような感じを与え、逆におかしいように感じられるのではないだろうか。

6. シュメール語におけるアスペクト表現をどう見るべきか

このような日本語における動詞の「る形」の使用法を考えると、シュメール語の未完了形についても同様な用いられ方がされているのではないかと推測することが可能である。

日本語話者なら「例え既に語られたことであっても、聞き手はまだ聞いておらず、これから聞くのであるから、未完了形で表現されてもよいのではないか」と考えることは難しくない。実際日本語では、そのような場合に「る形」を用いて表現してもおかしくはない¹⁰。それと同じことがシュメール語の場合にも言えるのではないかということだ。そのように考えれば、前半の表現に未完了形が用いられているのを次のように説明できる。

シュメール語の書簡ではまず最初に定型表現が来て、これが書簡であることを告げる。そしてその後に、差出人の命令や要望が続くのである。従って、例え現実に既に話されていることであっても、書簡の形式としては、聞き手は「伝えよ」という表現の後で命令を聞く（知る）ことになるのであるから、「話したことを」というより「これから話すことを」と表現する方が状況にあっているのではないかということである。

日本語では明らかに過去の事柄であっても、「る形」を用いることがよくある。それは日本語が主観性の強い表現を用いるからだと説明される。シュメール語の場合も同様に考えてもよいのではなかろうか。

しかし、この例だけではそうであるともそうでないとも断言できない。そこで、中村(2004)で挙げられた主観性に関わると言われる他の現象のいくつかについて、シュメール語ではどうなっているか検討し、シュメール語は英語やドイツ語と異なり（むしろ日本語に近いような）「主観性」の強い言語であることを示すことで、上のように考えることの妥当性を示したいと思う。

7. シュメール語におけるその他の現象

7. 1. 人称代名詞

日本語は「私」「僕」「俺」など様々な一人称代名詞を持つ。これは認知主体が聞き手や第三者との関係で自己を捉え、表現するからだという。これに対して英語では一人称代名詞は I のみである。シュメール語はこの点に関しては英語と同様、**ga2** 一つだけである。

7. 2. 擬声語・擬態語

擬声語・擬態語は I モードを反映した形式である。シュメール語にも擬声語・擬態語は見られる¹¹。文学テキストによく現れる。

7. 3 直接、間接話法

直接話法のほうが I モードである。シュメール語は明らかに直接話法をとる。

エンテメナの碑文 IV

24)e-ki-sur-ra 25)d.nin-gir2-su-ra 26)e-ki-sur-ra 27)d.nan\$e 28)ga2-kam
29)i3-mi-du11

(エンシのイルは) ニンギルス神の境界運河とナンシェ神の境界運河が私のものであると

言った。

7. 4. 主体移動表現

これは、話し手が移動しているときに、「橋が近づいてきた」のように自分の移動でなく対象が移動しているかのごとく表現することを指す。俄かには用例を指摘できないため、今後の研究を待つしかないが、これに多少関連を持つと思われる移動に関わる主観表現の例として、ventive（来辞）と呼ばれる要素の存在を指摘することが出来る。これは、対象が話し手に向かって移動してくる場合に動詞に用いられる要素(動詞接頭辞)であるが、重要なことは、自分が goal でなくても自分の方向に向かってくる、ないしは近づいてくる行為にはこの要素が用いられるということである。つまり、客観的には、自分のいる場所でなく他の特定の場所に向けられて移動する場合でも、たまたまそれが自分のいる方向と同じ場合には、まるで自分の方に向かって移動しているかのごとく表現するのである。

DP416

II. 1) SAR-uru-dul-ta 2) en-\$u 3) agrig-ge 4) na e-ma-ri 5) e2-gal-\$e-3 III. 1) e-ma-tum2

(材木を)ウルドゥルの果樹園からアグリグ職のエンシュが切ってきた。宮殿へ運んできた。

「運んできた」と訳出したが、宮殿へ運ぶという行為が、書記のいる方に向かってきたわけである。

同様の例として、

DP312

III. 2) 10 ba 3) e2-mi2-\$e3 4) nu-banda3 5) e-ma-tum2

…10 匹の亀。后宫へヌバンドが運んできた。

7. 5. 書簡のアスペクト表現は主観性の表れ

以上、中村（2004）の指摘した 16 項目の言語現象のうち、シュメール語の状況が多少なりともわかるものを 4 つ取り上げて概観してみた。このうち、最初の代名詞についてのみ英語と同じで、他の 3 つについては日本語と同様、主観性の強いモードで現れることを見た。もちろん、これをもってシュメール語が日本語と同様の I モードの強い言語であると直ちに断定することは出来ないが、少なくとも I モードでの表現が、英語やドイツ語のような言語よりは現れやすいという可能性は示すことが出来たのではないかと思う。

このことを考慮に入れば、シュメール語の書簡に見られるアスペクト表現が、欧米の学者が疑問に思うような不思議な表現ではなく、単に英語やドイツ語とは異なった(むしろ日本語と似た)表現の仕方の現れである可能性の方が高いと言えるのではないだろうか。

また、そのように考えることで、動詞の未完了形である e に対して完了形の用法を認め

るというようなありえない仮定をしなくてすむという利点もある。

8・終わりに

本稿で、シュメール語に多少なりとも主観性の強い表現が見られることが示されたと思う。シュメール語には、本稿で取り上げた表現以外にも一見不思議に見える表現が多く存在する。それらも主観性という概念を使って説明できるものがあるのではないかと考えているが、それはこれからの課題としたい。

注

- 1) 例えば Falkenstein (1959) p.36 には、*Dem Sumerischen fehlt ein grammatisches Geschlecht.*とか、*Fuer den fehlenden Dual tritt bei der Personenklasse der Plural ein.*といった記述が見られる。西洋の読者が念頭にあったのかもしれないが、そのような区別が「無い」ではなく「欠けている」としたのは、西洋の言語が標準的なものであるという考え方が無意識にあったのではないだろうか。
- 2) 中村 (2004) p.3ff.参照のこと。
- 3) 詳しくは池上 (2006) を参照のこと。
- 4) 9つの用語とは、1) 印象的／分析的、2) 非報告的／報告的、3) 経験的／物語的、4) オン・ステージ／オフ・ステージ、5) 状況中心／人物中心、6) 経験的／外部的、7) S・パースペクティブ/O・パースペクティブ、8) 直接的／外置的、9) 全体的／分析的)である。
- 5) 中村(2004)p.33ff、中村 (2006)などを参照のこと
- 6) ここで日本語と英語が対照的な様を見せるのは、単にこの二つの言語で対照的に異なる言語現象を集めて来たからにすぎないように思われる。
- 7) この同じ意味の動詞の形の違いが、シュメール語動詞組織における完了・未完了の対立によるものであることを始めて指摘した論文が Yoshikawa(1968)である。
- 8) これはもちろん、すべての欧米の学者がそのような考えているということではなく、そのような学者もいるということである。現にシュメール語の書簡を集めた Sollberger (1966) や Michalowski (1993) では、この表現に対する疑問は挙げられておらず、翻訳でも英語の現在形で訳されている。
- 9) 同書 p.4ff.
- 10) 筆者は、アメリカのクイズ番組を見ていて同様の感想を持ったことがある。その番組では、街頭で人々に問題を出して答えさせるのだが、その様子を撮ったビデオをスタジオにいる参加者に見せ、果たしてその人は問題に正解を出したかどうかを聞くのである。そのときの司会の言葉は、*Did he get it right?*のように、過去形になっていた。確かに撮ってきたビデオを見るのであるから、「正解したでしょうか?」と問うのはおかしくない。日本語でもおかしくない。しかし、日本語では普通「正解するでしょうか?」と「る形」で答えるのではないだろうかと思ったのである。このような場合、英語でも過去形を使わない表現も可能のようだが、普通は過去形を使う。
このことを日本でアンケートの形で何人かの日本人や外国人に聞いてみたところ、ドイツ人はいずれもこのような場合過去形で答えるとの回答を得た。現在形(または未来形)で答えるのはおかしいとのことであった。日本人はこのような場合、現在形と過去形のどちらも普通に用いるようであるが、若干現在形の方が多かった。30人程度の調査であったので参考にはならないが、筆者の直感とは合致していた。
- 11) Yoshikawa (1979)には、オノマトペと思われる動詞の *reduplication* 表現が取り上

げられている。日本語のオノマトペと音声的に類似したものがかなり見られるので、オノマトペであることは間違いないと思われる。

参考文献

- A. Falkenstein (1959) *Das Sumerische, Handbuch der Orientalistik*, 1. Abt./Bd. 2, Leiden.
- 潘・小澤 (2006) 「時間認識は言葉にどう表れるか」『月刊言語』Vol.35, No.5, 大修館書店
- 池上嘉彦 (2006) 「<主観的把握>とは何か —日本語話者における<好まれる言い回し>」『月刊言語』Vol.35, No.5, 大修館書店
- S. Iwasaki(1988) A study of speaker's perspective in Japanese spoken discourse, PhD. Dissertation. UMI
- B. Kienast & K. Volk(1995), *Die Sumerischen und Akkadischen Briefe*. Stuttgart.
- Langacker (1985), Observations and speculations on subjectivity. In *Iconicity in Syntax*, ed. John Haiman, 109-150. Amsterdam: John Benjamins.
- P. Michalowski (1993), *Letters from early Mesopotamia, Writing from the Ancient World*, No.3, Atlanta.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」中村芳久(編)『認知文法論II』3-51 大修館書店、東京。
- _____ (2006) 「言語における主観性・客観性の認知メカニズム」『月刊言語』Vol.35, No.5, 大修館書店
- E. Sollberger (1966), *TCS I, The business and Administrative Correspondence under the Kings of Ur*, Locust Vally and New York.
- M. Yoshikawa (1968) The Marû and Hamtu Aspects in the Sumerian Verbal System, *Orientalia* 37, 401-16.
- _____ (1979) Verbal Reduplication in Sumerian, *Acta Sumerologica* 1, 99-119

略語

- DP : A. de la Fuy e (1908-1920), *Documents pr esargoniques*, Paris,
- TCS : *Texts from Cuneiform Sources*.